

「でもいいの？降参したら、お仕置きだよ」

「そうだなあ……。せっかく尿道でも感じられるようになったし……次は……」

「尿道をもっとめちやくちやにしちゃおうか」

「それとも、もっと他の孔を騷けられたい？」

くすくすと男たちの微笑がさざなみのように少年を取り巻く。

頷きかけた首は硬直して、かといってこのままでいるのは、もう^{いっとき}一時も耐えられそうにない。

「ひう…ッ♡あああ…ッッ！♡♡」

冷水に飛び込む覚悟で、半歩後ずさる。

ただでさえ食い込みすぎな紐が尻の割れ目と会陰を擦り上げ、気絶しそうな快感が体内を痺れさせる。

それでもはやく終わらせなければと、爪立てのまま必死に紐を渡りつづける。

「ひあ”…ッ！♡♡」